

バチカンはずなぜ力を持っているのか 精神的支えだけでなく情報網、そして政治力

バチカン（ローマ法王）はずなぜ力を持っているのか。日本経済新聞による解説によると、

大国も顔負けの情報収集力（世界の隅々に渡るネットワーク）

長い伝統と経験に裏打ちされた外交官の能力の高さ

この解説には何かが不足しているような気がします。最近は無神論者が増え、実生活における宗教の重みも減じたとはいえ、やはりキリスト教は全世界において（ある程度は）精神的支柱の位置を占めているのではないのでしょうか。

国際政治はモノの損得、国土を取ったり取られたり、あるいは利権を争ったりの世界ですが、そこに精神という異質な世界、バチカン王国（法王国）が存在するわけです。世界の国やそこに住む人々の価値観は大きく異なりますが、キリストへの信仰では世界帝国ともいえるべき世界が作り上げられています。そこにバチカンの強みがあるのではないのでしょうか。キリスト教徒でない多くの日本人でも、不思議とローマ法王には一目置いています。



本社コメンテーター 秋田 浩之

ローマ法王フランシスコが11月下旬に来日すると決まった。天皇陛下と会談するほか、被災地である福島、広島を訪れる。ローマ法王の来日はアジアへの関与を深める路線の一環で、ヨハネ・パウロ2世以来、実に6年ぶりだ。法王は約1億人のカトリック信者を率えるとともに、独立国バチカン王国の国家元首でもある。権威や人徳でどんなメッセージを奏するか、国内外の関心が高まっている。

大国も黙る法王の情報網

米ソ冷戦末期には、法王が教団にわたって其連年のポーランドを訪問し、民主化運動を精神から受けた。それが「ベルリンの壁」崩壊のきっかけにもなった。法王はソ連から入教として恐れられた。1981年には、聖母マリア像に刺さったような例がある。▼今年2月、内閣が訪米スエーデンのラウル・カストロ国政評議会議長を擁護し、2015年の国交正常化につなげた。▼今年2月、内閣が訪米スエーデンのラウル・カストロ国政評議会議長を擁護し、2015年の国交正常化につなげた。▼今年2月、内閣が訪米スエーデンのラウル・カストロ国政評議会議長を擁護し、2015年の国交正常化につなげた。▼今年2月、内閣が訪米スエーデンのラウル・カストロ国政評議会議長を擁護し、2015年の国交正常化につなげた。